児童の自己決定を育む場としての劇づくり

―総合学習「くまの子ウーフのクリスマス」の実践から―

鈴　尾　修　司

1　はじめに

人として生まれた私たちはよく生きたいと願わずにはいられない。中村（1977）は「よく考えることなしには，よく生きることはありえない」と述べているが，私たちが望む生（よく生きる）とはよく考えることに支えられているといってよいだろう。これは何も成人に限ったことではない。人格形成の途上にある児童にとっても，よく生きることは大きな課題である。昨今の不登校などの問題も単に学校への適応，不適応というだけでなくよく生きることについての明確に意識せざる悩みという視点からみることも可能と考える。養護学級においても，児童がよく生きようとする営みを支え，育むための教師の支援が重要である。よく生きることはよく考えることであると述べたが，よく考えるための主体は自己（一般的な意味において）である。自己が望むよりよい生を追究するならば，よく考え，よいと判断できる方（よくないと考えられることを消去することもあろう）へ決定する行為が必要である。自己決定はよく生きることへつながる。本校の研究テーマである「自立に向かう子どもたち」の「自立」の基礎には自己決定する力をつけることがある。

本学級では自立に向かう子ども像を本学級の教育目標である「生活力のある児童」とのかかわりから，「児童がその子なりの考えをもち，よりよい方向を目指して進んで考え，判断し，表現していく（行動していく）子ども」と捉え，この力を児童が持つことが「自立へむかう子ども」と考える。更に，この力を育んでいくための研究の視点を次のように設定している。

①自己決定する場や活動の設定

②学習の汎化を図る場や活動の設定

③社会や多様な集団での関わりの場の設定

本稿においては中でも①「自己決定する場や活動の設定」に視点を置いてそのための試みを報告する。

2　指導事例「くまのこウーフのクリスマス」(※)

養護中学年組（3年生男児2名，女児1名，4年生男児2名，女児1名）

(1)　単元について

劇づくりはお話を理解する，せりふとして表現する，歌を歌う，身体表現をする，劇の衣裳や小道具・大道具を作るといった活動を総合的に組織できる学習である。さらに，発表会（本単元においてはクリスマス会を発表の場とした）のような場を設定することで児童は目標をもち，目的意識をもって継続的に学習することができる。また，劇づくりの学習においては，一人ひとりが自分の課題に取り組むことのみならず，集団の中で自分の役割りを意識し，お互いにかかわり合いながら学習を進めることができる。

本学級の児童は毎週1回「おはなし会」（養護学級合同の国語）で，絵本の読み聞かせや紙芝居，パネルシアター，エプロンシアターなどでお話をした後，自分たちで実際にお話を演じてみるような劇遊びを続けており，劇づくりには平素から親しんでいる。

本題材は総合学習「クリスマス会」の中の学習活動として設定した。児童はいくつかのお話の中から「クリスマス会」で劇にしたいお話を自分たちで選び，劇づくりの活動を展開していった。学習にあたっては，児童の実態をふまえて，児童が楽しみながら活動でき，児童相互の関わりがもち

やすいように配慮し，いくつかの劇の題材を提示したが，劇の題材を選択するにあたっては次のような観点から設定した。

①児童一人ひとりがそれぞれの段階に応じて理解しやすい内容であること。

②児童の興味・関心のもてる活動が設定できること。

③児童の個性を生かせる配役ができること。

④できるだけ観る側も内容を知っているか，親しみをもちやすい内容であること。

（※）本題材は神沢利子（1979）「赤いそりにのったウーフ」をもとに，児童の劇遊びの中から作られたストーリーと児童の言葉から改作した「くまの子ウーフのクリスマス」の実践である。

(2) 児童の実態

劇作りにかかわる児童の実態と必要と考えられる教師の支援は次の通りである（表１）。

表１．児童の実態と必要な支援

児童	実　　態	必　要　な　支　援
a	お話を聞いて大まかな筋や登場人物を理解し，表情豊かに表現する。	話の流れに応じた台詞や動作による表現ができるよう言葉掛けをする。一緒に出演する友だちの手助けをするよう励ます。
b	お話の一つ一つの場面と全体のあら筋を理解し，場面に応じた自分なりの表現をする。	話の筋や登場人物についてよく理解しているので，シナリオに拘らない状況に応じた固有の表現ができるよう言葉を掛ける。
c	お話の一つ一つの場面と全体のあら筋を理解し，場面に応じて表情豊かに表現する。	話の筋や登場人物についてよく理解しているので，他の友だちの手がかりとなるよう台詞や歌，動作の表現ができるよう促す。
d	お話を聞いて大まかな筋を理解し，音楽などを手がかりに自分なりの表現をする。	音楽や友だちの活動を手がかりにして自分の表現ができるよう手がかりになるもの（こと）を明確にする。
e	一つ一つの場面及び全体のストーリーを理解し，場面に応じて工夫したせりふや動きを適切に表現する。	話の筋や登場人物についての理解に基づき，状況に応じた固有の適切な表現ができるよう励ます。友だちの活動を手助けするよう促す。
f	お話を聞いて大まかな筋を理解し，音楽などを手がかりに自分なりの表現をする。	音楽や友だちの活動を手がかりにして，自分で考えて活動し，自分なりの表現ができるよう励ます。

(3) 指導目標

①自分が演じたい劇や配役を自分で決めて意志表示できるようになる。

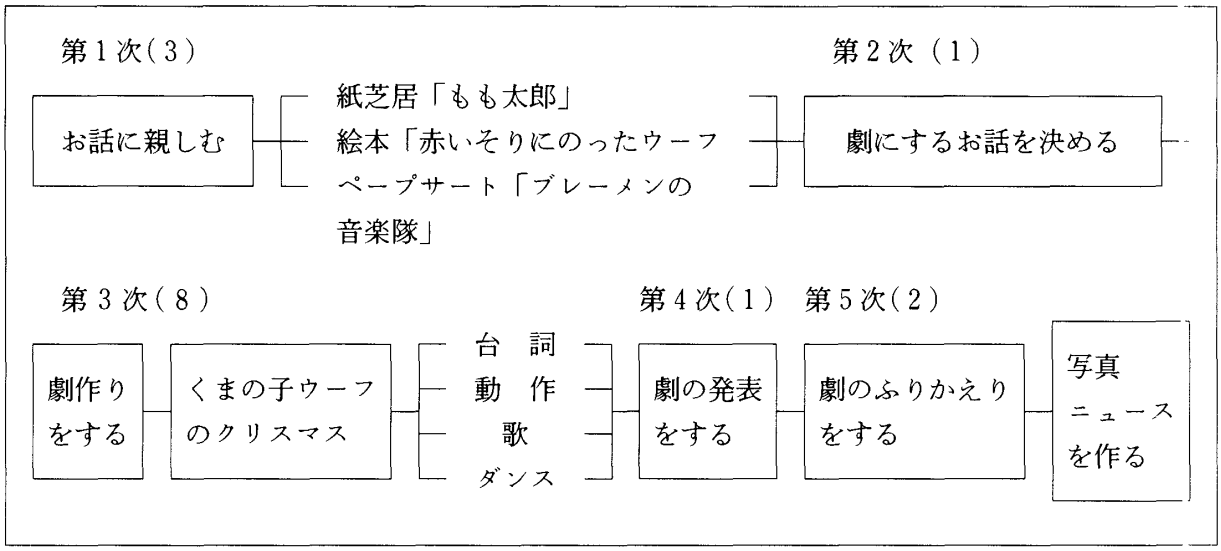
②劇の中で自ら進んで表現しようとする意欲を育てる。

③道具や音楽を手がかりに自分の役割を演じることができるようになる。

(4) 指導内容と計画

指導内容と計画を表2に示す。

表2．指導内容と計画



(5) 指導の実際

本単元での指導の実際について概略を表3に示す。また，児童の配役と学習中の様子については表4に示す。

表3．学習内容と児童の反応

	学　習　内　容	児　童　の　反　応
劇に親しむ	劇作りの導入として，これまでにもおはなし会等で親しんできた「ももたろう」と「ブレーメンの音楽隊」に国語の学習でとりあげた「赤いそりにのったウーフ」を視聴した。	児童はこれまでにも親しんできたお話を話の展開への期待も込めて熱心に聞き，早速自分たちで演じてみて楽しんだ。
劇を決める	クリスマス会で劇にするお話を児童が選んで決めた。	最終的には「赤いそりにのったウーフ」を選んだが，多分にクリスマス会前という時期的な要因があったように思う。
劇作りをする	「赤いそりにのったウーフ」については，劇にする際の登場人物に児童一人ひとりが思いを持ちやすいように登場人物及びストーリーを一部改作した。お話の題についても児童の言葉を採用して「くまの子ウーフのクリスマス」とした。お話が決まってからは，児童の希望にしたがって配役を決め，劇遊びをしながらあらすじを理解するようにしていった。	あらかじめ児童の個性を発揮しやすいように配役を設定したが，何度か劇遊びをするうちに児童も自分のしたい役がはっきりし固定してきた。また台本も劇遊びの中で児童から出た言葉や日常生活の中で児童が自然に言える言葉を選び台詞として取り入れていった。
劇の発表	クリスマス会の中の中学年の発表として取り組んだ。	養護学級の友だちや保護者だけでなく1年生もたくさん見に来てくれたいへん熱心な演技ができた。
振かえり	クリスマス会のあと写真をもとに劇をしたときのことを振り返り，写真ニュースにまとめた。	劇の発表の様子を友だちに話しながら集中して取り組めた。

表4．児童の配役と学習中の様子

児童	配　　役	学　習　中　の　様　子
a	ウーフのお母さん スノーマン	強いヒーローへの憧れが強い本児はウーフたちを助けるスノーマンを意欲的に演じた。話の流れにそって適切な言葉「もう帰りなさい」等自分で考えて言うことができた。
b	ウーフのお父さん スノーマン	朝の会などで自分から人前で話すことはあまりしないが，劇になると自分からマイクの前に立って台詞を言ったり，ダンスをしたり楽しそうにした。
c	ウーフの妹 サンタさん	話の流れを細かいところまでよく理解して台詞や動作ができた。d児へさりげなく次の動作を教えたり，他の友だちへの配慮も見られた。
d	ウーフ	これまで音楽や道具の手がかりに加えて，友だちと一緒に演技をすることが多かったが，音楽や友だちの台詞，動作を手がかりにして自分で判断しながら演ずることができた。
e	ツネタくん	自分の台詞や動作だけでなく，一緒に演じている友だちに小声でそっと台詞を教えたり，次の動きを促す行動が見られた。
f	ミミちゃん	劇が大好きなf児は人前で話すのは苦手だが，劇になると自分からマイクのところまで出て話したり，ダンスを踊ったりできた。ダンスも自分で動きを工夫した。

写真1．くまの子ウーフのクリスマス1

写真2．くまの子ウーフのクリスマス2

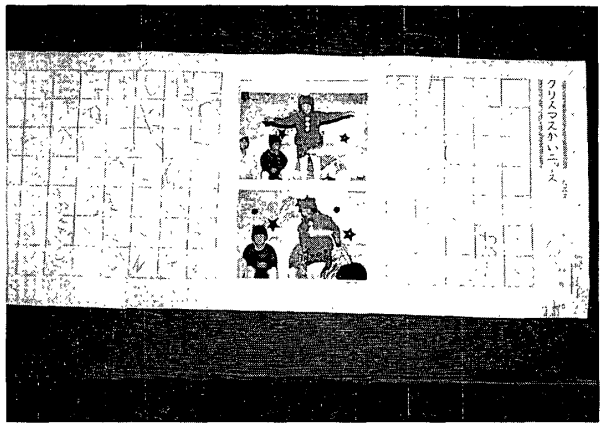


写真3．児童の書いた写真ニュース

前ページ写真1・2はクリスマス会当日，児童が劇を演じているときの様子である。児童は自分で選んだ配役で劇を楽しんでいる。ここで見られるダンスも音楽に合わせて児童が自然に身体を動かしてできたものである。

写真3は劇の発表の後，当日の写真を見たり録音テープを聞いてクリスマス会のことを思い出しながら書いた「写真ニュース」である。

3 考　察

本事例において主に児童の自己決定の場となったのは次の3点である。

①クリスマス会で発表する劇の演目：どんな劇がしたいか。

②劇の配役：自分はどんな役をしたいか。

③劇の台詞・演技・ダンス：劇の流れを把握した上でどんな演技をするか。

本事例では劇作りを通して児童が自己決定する場を提供することを検討してきた。児童は自分で劇の演目や配役を決めていこうとすれば，それが児童自身にとって「したい劇」「したい役」である必要がある。児童にとって「してみたい」という意欲を生み出すためにはその劇なり配役なりを「好き」になることが必要である。そのためには何よりも「楽しかった」「おもしろかった」「やってよかった」といった満足感，達成感が児童に感じられなければならない。児童は劇は楽しい，おもしろいという体験を積むことによって劇を好きになっていく。

前にも述べたように本学級では，毎週「おはなし会」で絵本や紙芝居，ペープサートなどによるお話の読み聞かせを続け，児童は教師が演じたお話をもとに劇遊びに親しんでいる。おはなし会では何度も同じお話を繰り返し演じることにより児童にとって劇に登場する登場人物にも親しみをもち，お話の展開にも理解を深めていくことができる。児童にとっては1回1回の劇を演じることはそれぞれ完結した体験となって身につくことでもあり，また同時に積み重ねとなって深化していく体験でもある。いくつかのお話を視聴し自ら演じていく中から自分の好きなお話，自分の好きな登場人物が浮かび上がってくる。児童にこのように児童自身の指向ができてきて選ぶことが意味を持ってくる。

また，「おはなし会」で児童に提供するお話は劇を選ぶ際の選択の視点としてあげた下記の4点と変わりないものである。ただし，④の内容の既知性については新しいお話を選ぶ際には①から③が十分検討されていれば特に問題とはならないだろう。

①児童一人ひとりがそれぞれの段階に応じて理解しやすい内容であること。

②児童の興味・関心のもてる活動が設定できること。

③児童の個性を生かせる配役ができること。

④できるだけ観る側も内容を知っているか，親しみをもちやすい内容であること。

本事例においてはクリスマス会で上演する劇を選ぶに際してこれまでに「おはなし会」でたびたび演じたことのある「ももたろう」と「ブレーメンの音楽隊」，そして国語学習の中の主に図書の時間に親しんできた「くまの子ウーフ」のシリーズから「赤いそりにのったウーフ」を選んで児童に提示した。筆者の予想では児童はお話をしたばかりの「ももたろう」を選択すると考えていたが，実際には初めてお話を聴いた児童もいる「赤いそりにのったウーフ」が選ばれた。これについては

「くまの子ウーフ」のお話に児童がこれまでにも親しんでいたことの他に，時期がクリスマス前であり，クリスマス会に上演するだしものとしてはサンタクロースの登場するこのお話が選ばれたものと思う。筆者の予想を越えて児童にとっては季節や行事との関わりも意識されており，あらためて季節に応じた学習の必要性も認識された。

配役については原作では登場人物が学級の児童数に比べて少ないことと，劇化した際に登場する機会に多い少ないのばらつきがあったため，原作にはないスノーマンを二人加えて改作した。改作は劇遊びの中で児童から自然に口をついて出た言葉や動きをストーリー化していったので「くまの子ウーフのクリスマス」は原作からはかなりはずれたものになった。原作からははずれたものとなったが，劇作りという観点からは児童の自然な言葉を劇のストーリーとして再構成していくという点で児童の自己決定の場を作ることができたと考えている。

このように劇作りは，本事例でも示されたようにそれぞれの児童が自身の思いを登場人物に託し自分のこととして意欲をもって取り組みやすい活動である。本稿ではあまり触れなかったが，劇作りの中では必然的に友だちとの関わり合いが生じてくる。いろいろな友だちと関わり合うなかで劇を作り劇を演じることとなる。劇は一人ひとりの児童の自立を促していく場でもあり，同時に友だちとの関わりによってお互いに支え合い助け合って育っていく関わりの場でもある。

引用文献・参考文献

神沢利子　1979　赤いそりにのったウーフ　ポプラ社
中村雄二郎　1977　哲学の現在　岩波書店
岡本夏木　1982　子どもとことば　岩波書店